

令和7年1月14日

言葉だよりNo.9(第430号)

「ハンセン病から学んだこと」

井伊

私は2年次から人権委員をしており、ハンセン病について詳しく学ぶ機会がありました。その中で私は、国や周囲の人々がハンセン病を恐れるあまり行った酷い差別の状況を知り、同じ歴史を繰り返さないためにできることはないかと考えるようになりました。

ハンセン病とは、「らい菌」と呼ばれる菌によって引き起こされる感染症です。症状として、感覚が鈍くなったり、顔や手足などの目立つところの変形したり不自由になったりするため、昔から恐れられていました。国の間違ったハンセン病への対策が原因で、患者やその家族が差別され、今なお続く大きな人権問題となっています。

今年度、国立ハンセン病療養所「大島青松園」に研修に行く機会があり、人権委員と医療系の進学を目指す生徒5名で参加しました。

事前学習会では、明浜町出身の詩人で入所者であった塔和子さんについて学びました。家族に迷惑をかけないために偽名を使って生活をしたり、病気であるにも関わらず働かされていたりと、過酷な生活環境にとても驚きました。新型コロナウイルスの際も差別が問題になりましたが、それとは比べものにならないものでした。

そして、実際に訪問して特に印象に残っていることは、昔は患者の数に対して、医者や看護師の数が足りていなかったことでした。そのため、患者同士が看護や介護を行っていました。当時は、治らない病気とされており、対応が難しかったという事情はあると思います。しかし、危険な病気だからこそ、患者を不安にさせない工夫をすべきです。この状況を知った時、国は半ば治すのを諦め、治療を放棄しているようで嫌な気持ちになりました。献花を行った納骨堂では、亡くなった際に多くの遺骨は引き取り手がなく、故郷に帰れなかったと聞き、心が苦しくなりました。

未知の病気を恐れるのは分かりますが、それが患者にひどい扱いをしていい理由にはならないはずです。人の恐怖が偏見を生み、偏見が真実のようになり、多くの方が差別と病気の二重の苦しみの中で亡くなりました。こうした歴史を繰り返さないためにも、正しく学んだ人が正しく発信していく必要があります。

そのために、12月14日(土)に、この研修会に参加した野村、宇和、三瓶の生徒が、報告会を実施しました。他の高校の発表で、自分だったら皆に混じって加害者になっていたかもしれないと聞いて、当時のことを聞いた自分も「確かにな」と感じてしまいます。今回の活動で人権教育の大切さや周りに流されない強い人になるべきだと学びました。そのような人になるために、これからも人権について深く学んでいきたいと思っています。そしてこれから差別問題が出ないよう、活動を継続していきたいと思っています。